

平成28年熊本地震

被災寺院を訪ねて

熊本市・正教寺 全壊した本堂を再建

「本堂は大切な場所、心の依りどころ」

平成28年熊本地震から6年、熊本市中央区の被災寺院・正教寺を訪ねた(写真左)。出迎えてくれたのは甲斐知史住職と前坊守の淳子さん(94)、門徒総代の田尻俊博さん、門徒の山口スミ子さん。3年前に再建したばかりの、新築の香りが漂う本堂に案内してもらい、この6年の歩みを聞いた。



なんとか持ちこたえていたが、16日深夜の本震で全壊した。だ。その中心として動いたのが、父・清一さんから門徒総代を受け継ぎ、長年、正教寺を

「被災した本堂を見るときは絶望した。本堂のふすまや障壁画を新調したばかりで、本当にまさかの出来事だった。家族の無事を確認し、落ち着いてからいろいろと考えてはみたものの、何をどうしていいかわからず途方に暮れた。再建の寄付を募るにも門徒さんも多く被災されているだろうし、もう無理なんじゃないかと心が折れそうになった」と振り返る。

それでも門徒からの多くの寄付に加え、宗派からの見舞金などで本堂再建のめどが立ち、2年後の平成30年11月に再建。翌年5月に本堂落成慶讃法要と住職継職法要を営ん

問題ないからそのまま住み続けている」と現状を語りつつ、「当時は本堂がなくなったのがつらく、大切なものを奪われた気持ちだった。お聴聞のひととき

は心が洗われた気持ちになるし、門徒の友人と集まってお話しでき

る、私にとって楽しく大切な場所であり、心の依りどころ。だから震災から2カ月を過ぎた頃に庫裏で法座を再開すると連絡を受けたときは、とてもうれしかった。今は新型コロナウイルスの流行でまた法座が中断していて、震災直後に戻ったみたいでさみしい」と語る。

甲斐住職は「地震は人の大切なものを奪っていく。正教寺も門徒の皆さんも完全な復興にはまだ時間がかかる。だけど、地震をきっかけにいのちの尊さや、ご門徒をはじめ多くのご縁に支えられていること、そして浄土真宗のみ教えの有り難さを、今あらためて実感している。私の役目はそのみ教えとご縁を伝え、守りつないでいくこと」と思いを語る。門徒の思いを形にした新たな本堂とともに、正教寺は今、新たな歩みを進めている。



再建した本堂で行われた常例法座
 令和元年7月